

ひよく 比翼の束 第七十一回

超高齢社会

「年老いた私が、ある日今までの私と違っていたとしても、どうかそのままの私のことを理解して欲しいー
(手紙／親愛なる子どもたちへ)」

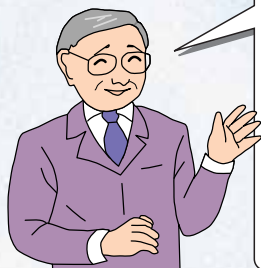
9月15日は「敬老の日」であった。矢板市の各行政区などでは敬老会を開催し、長寿を祝い、多年にわたって社会に尽くしてくださったことに感謝の意を表した。

現在、矢板市の総人口に占める65歳以上の高齢者の割合(高齢化率)は26.2%である。

また、団塊の世代の方が75歳の後期高齢者になる2025年(平成37年)には、高齢化率が33.1%になると予測している。

少子化の流れが止まらない上に、高齢化が急速に進んでくると、働き手不

私(市長)の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



足が深刻化し、日本経済は低滞する。

国民の豊かさは損なわれるだけでなく税金は減って、公共サービスや社会資本の整備が滞ることになる。

さらに若い世代の社会保障費の負担は重くなり、さまざまな分野に深刻な影響があらわれる。

人口減と超高齢化への対策は、わが国にとって喫緊の課題なのである。

矢板市においても介護の問題、認知症対策は早急に取り組みしなければならぬ。

厚生労働省は、これまでの調査・研究などから認知症患者の推定数を高齢者の15%と推定している。

また、正常でもない認知症でもない(正常と認知症の中間)状態の人の数は、高齢者の13%と推定している。

これを矢板市に置き換えると、認知症の方は1,345人、正常と認知症の中間にある方は1,165人ということになる。

また、現在矢板市の要介護認定者の数は、1,147人であり、そのうち認知症者は833人で、要介護認定者の実に72.6%を占めている。

超高齢社会を迎え、高齢者が住みながら自立した日常生活を営むことができるように、医療・介護・介護予防・住まい・生活支援が受けられるような環境整備が早急に求められているのである。

今般、地域における医療と介護のサービスが受けられる環境を整備するための法律(地域医療介護総合確保推進法)が成立し、「地域包括ケアシステム」づくりを市町村が主体的に取り組むこととされた。

したがって、今後は市町村の取り組み状況によっては、サービスに格差が生じるという問題も起こってくる。特に在宅介護にあつては医療との連携が重要となってくる。

また、高齢者の社会参加をより一層推進することを通じて、元氣な高齢者が、高齢者の生活支援の担い手として活躍することで、高齢者が社会的役割を持ち、生きがいや介護予防にもつながっていく取り組みを進めていかなければならない。

先頃、敬老の日に先立って、例年実施している市内の100歳以上の高齢者宅と特別養護老人ホームを慶賀訪問した。現在矢板市内の95歳以上の高齢者は103人で、そのうち100歳以上の方は20人である。それぞれの長寿高齢者に接して、いつまでも元氣であつて欲しいと願った。

また、間もなく後期高齢者になる自分自身の生き方を含めて、さまざまなことを考えさせられた。:
「上善如水」(上善は水の如し)という言葉がある。

中国春秋戦国期の思想家老子の言葉である。意味するところは、最高の生

き方は水のように生きることだそうである。

つまり、水は自分の存在を主張しない。丸い器に入れば丸くなり、器に逆らうことなく形を変える柔軟さがある。また、低いところに身をおくのは誰でも嫌うものであるが、水は人の嫌がる低いところに自然に流れる謙虚な姿で、自分を誇示しようとしなない。

さらに水は内に大いなるエネルギーを秘めている。ゆるやかな流れは人の心を癒し、硬い岩をも砕く力をもっている。

このように水は柔軟、謙虚、秘めた力をもっている。

そして大地を潤し、草木を養い、どの渴きを癒し、私たちにさまざまな恩恵を与えてくれる。

それでいて、我も張らず、他と争うこともなく、人の嫌がることも謙虚に行う。

水のように、しなやかで形にとらわれない生き方こそ、実は最も強い生き方なのだ教えている。

大河ドラマ「軍師黒田官兵衛」は晩年出家し、「如水」と号したそうである。

かつて新潟県南魚沼郡の白瀧酒造を訪れた。老子の思想に重ね合わせてつくった「上善如水」、最良の酒は限りなく水に近づくという蔵主の話を聞いたことがある。

秋の夜長、虫の声を聞きながら一人もの想うのもまた格別である。

※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。